

共同研究課題

「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」

第1回研究会要旨 (2017年6月11日)

「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」をはじめるとあって

西井 涼子 (人類学)

本研究会の目的は、人類学における「存在論的転回」以降、経験と記述をつなぐフィールドサイエンスとしての新たな方法論を追及することである。それは、人類学のみならず、認知科学、哲学、芸術など様々な方法論を接合して「生きている現実」として把握しているもの、目に見え体験されるものの水面下での異質で複雑な内在的な力=情動の流れの絡まり合いを「ダイナミズムとしての生」として捉えなおし、思考することである。

本発表では、菅原和孝『動物の境界』(2017)の環境と虚環境の概念や、インゴルドの生命=物質一元論ともいえる思想から、生命への接近を図った。さらに、ギブソンもユクスキュルの、世界の「意味」を、有機体と環境の関係性との関連も検討した。また、人類学における「参与観察」といわれる手法をあらためてこうした思考に位置付け、観察者もまた参与者として世界の流動の一部をなすという新たなモデルや記述方法が必要であるとした。

岩田慶治の『カミと神 アニミズム宇宙の旅』(1984) 参与するということに関する次の言葉は示唆的である。「それは、この世とあの世のあいだにある壁を突破するということである。身体と魂のあいだにある壁を突破するという、形ある世界と形なき世界のあいだにある非連続を乗り越えるということである。そうすることによって生命の全体性をとらえるということである。生命の世界のただなかに突入するといってもよい。」

キーターム：身体、感覚、生命、情動、偶有性、潜在性

脳の中の會長

郡司ベギオ幸夫 (理論生命科学)

ライフゲームの提唱者コンウェイと、隠れ変数による量子論の書き換えが不可能であることを証明したコーエンは、2006年、自由意志定理という名の刺激的論考を発表した。そこでは、素粒子の観測を始める・やめる自由意志を認める限り、観測される素粒子レベルに自由意志を認めざるを得ない、ことが結論づけられた。ここで重要なことは、自由意志、決定論、局所性の三つの要素がトリレンマをなしており、量子論を認める限り、局所性を破棄することになるという主張であった。

本講演では、このトリレンマが、分析哲学者であるマイケル・ダメットにおける1978年の論考(過去を変えようと祈る會長の踊り)に既に認められ、かつその構造が、脳における無意識と意図的意識が成す構造に認められることを示した。さらに、これを展開し、自由意志、決定論、

局所性から構成されるトリレンマから、三つの意識構造が導かれることを示した。第一の意識は、局所性を破棄したことで成立する定型者(平凡な我々)の意識に対応するであり、第二の意識は、自由意志を破棄したことで成立する自閉症シンδροームを有する者の意識に対応する意識、第三の意識は、統合失調症を有する者の意識に相当する意識と考えられる。最終的にトリレンマ成分の採用・破棄に関する評価を二値論理から多値に変えることで、三つの意識のスペクトラム、及び動的変容が認められることを示した。

動態を捉える／に捉えられるには？

塩谷 賢 (科学哲学)

動的な現象は、それを対象として捉えようとする、その動態性を失い、我々が後から理解において動態性を付加する。生＝ダイナミズムと考える本研究会では、このような観念的な動態性の捉え方では、取りこぼしてしまう恐れのある生の局面に目を向け、そのための方法論の基礎的な探求が必要である。

当発表では、ダイナミックであることと「現実的」であることのリンクを起点に、G. Frege の論理についての、判断を基礎とする哲学的見解から、存在を示す動詞（繫辞）が判断という思考作用との関わりにおいて、特権的な地位を占めることの重要性をとらえ、これをモデルとして、現象の表現に現れる動詞と思考者の動態性を取り結ぶ契機として「値」という様式を設定し、値の構造的連関とその連関の存在性を、構成的力と状態的力の2概念及びそれに相関する構成的時間と遷移的時間によって考えた。とくに後者を軸として、現実的なものとして構造化された値と、構造化そのものの多数性・多様性の弁証法的絡み合いを、共鳴概念を介して考察し、顕在的のみならず潜在的な関係性が持つ重要性について論じた。

以上は方法論的基礎の方向を示唆する原理的、思弁的な試みであるが、「値」への思考者・研究者の参与や潜在的な関係を取り込むことで、被研究者と研究者の実存の関わる水準への関与を示し、フィールドワークや実践についての方法論的重層化、異分野との相互乗り入れの可能性の一方向を示唆した。